

『覺りの道への階梯小論』第九回 (2009.6.29)

第五 [J5] [それから受胎するときに生を受ける仕方]。[中有から] 子宮に生まれようとしているならば、父母の精血を [父母であるかのように] 誤った認識が生じる。そのとき、父母は性交していないにもかかわらず、性交している [様子] が幻影のように見え、それに対して執着すると『瑜伽師地論』に説かれている。・・・

その場合にも、女として生まれるならば、女性と離れたいと思い、男に対して執着して寝たいと思うのである。男として生まれるならば、男と離れたいと思い女性に対して執着して寝たいと思うのである。

そのような欲が生じて [男性か女性かに] 近づいていくのに従って、男性か女性の他の体の部分は何も見えずに男女の徴 (性器) 二つのみが見える。それに対して怒りを感じ、その中有から死んで生まれ変わるのである。

・・・

第二 [F2] [それが生じたかどうかを判断する基準]。以上のように、苦しみ [についての真実] と生起 [についての真実] という二つの観点から輪廻の特徴を詳しく知ったとき、それを捨てたいという思いと、それら [輪廻] が消滅した [境地] を得たいという思いが生じただけで、[輪廻から] 出離の考え [が生じたことになる] けれども、それだけで十分なわけではない。それゆえ、火が燃えている家に入った人や、牢屋に収監された人が、閉じこめられたその場所を決して望まず、そこから解放されたいという意識が生じる、それと同じくらい [強く出たいという] 心を生じさせるべきであり、それからさらに [その心を] より強固にしていく必要がある。

シャラワがおっしゃるように、酸っぱくなったミルクに注いだ粉が表面に粗雑な層しか作らないのと同様、この考えは、表面的で粗雑な決意に他ならない。輪廻の原因である生起 [の真実] を望まないという見解もまた、その [粉] と同様 [、粗い出離の気持ち] しか生じないとするならば、苦しみと [その] 生起 [の原因] が消滅するという消滅 [の真実 (滅諦)] である解脱を求める [気持ち] もそれと同様 [表面的で粗雑なもの] になってしまうであろう。

したがって、解脱への道を実現したいと望んでも、それは言葉だけのものとなり、他の衆生が輪廻を彷徨って苦しんでいるのを耐えられないと思う憐れみの心も生じて来る余地はない。また嘘偽りのない無上の菩提心を [他者に] 勧めることのできる能力もまた生じることはあり得ないので、大乘者と言っても、言葉の上での理解が生じるにすぎないことになってしまうので、そのことを繰り返し修習すべきである。

第三 [F3] [それに対する誤解を退ける]。もし、輪廻に対して非常に不幸を感じ、[輪廻を] 厭う気持ちを修習したならば、声聞のように輪廻に留まることを欲ばなくなるので、[それでは自分一人が] 涅槃を求めるといふ消滅の極論に陥るので、[輪廻への] 嫌悪を修習するのは小乗にとっては美しいことであるが、菩薩がそれを修習するのは相応しくない。なぜならば、そのように『秘密不可思議経』に説明されているからである、と思うならば、[そのような誤りはない。] すなわち、「菩薩は輪廻を怖れてはならない」とお説きになっている意味は、業と煩惱の力によって輪廻を彷徨っているものが、生老病死などの苦しみに対して出離の心を起こすべきではないと説いているわけではなく、菩薩は [一切衆生を救いたいという] 祈願と憐れみの心によって、輪廻の中に衆生のために生を受けることを怖れてはならない、という意味なのである。

従って、業と煩惱の力によって輪廻を彷徨っているならば、〔自ら〕多くの苦しみによって苦悩することになり、自利も不可能になるので、利他〔が不可能になるの〕は言うまでもないのである。

それはあらゆる衰退の入り口であるので、小乗の人よりももっとずっと〔輪廻を〕厭い否定する必要がある。そして、祈願と憐れみの力によって、輪廻の中に生を取ることについても欲ばなければならないのである。その同じ經典に、「菩薩たちは衆生を全員成熟させ〔解脱させ〕ることを自らに引き受けて輪廻〔に留まること〕を利益があると考えるのであって、完全に涅槃することをそのように考えることはないのである」とお説きになっているのである。

以上のように区別せずに、〔あなたが〕上に言ったように主張するならば、その主張をする人に菩薩戒があるならば、煩惱を伴った悪い行為（悪作）を生じさせると『菩薩地』に説かれている。

輪廻を厭う気持ちが生じて、それら〔輪廻にいる〕衆生を自分の親族と見て、かれらのために覚りを目指す心を生じるというのが『四百論』の真意であり、〔そのことは〕チャンドラキールティ論師ははっきりとその注釈の中でご説明になっているのである。

第四 [F4] 〔解脱に趣く道の本質を確定する〕。前に説明した通り輪廻のデメリットを修習することによって、輪廻から出離したいという強い気持ちが生じた人は、輪廻を退ける必要がある。それゆえ、それには二節ある。

[G1] どのような抛り所（身体）で輪廻を退けるのか。

[G2] どのような道を修習することで〔輪廻を〕退けるのか。

第一 [G1]。『親友への書簡』に・・・とおっしゃっている通り、〔人身において〕有暇具足〔の境遇〕を得た今生において〔輪廻を〕退ける必要がある。なぜならば、暇（有暇具足）なくしては〔輪廻を〕退ける余裕はないからである。〔そのことは、〕以前に〔有暇具足の箇所〕で説明した。

偉大なるヨーガ行者〔チャンチュプリンチェン〕御前は、・・・。ポトワ御前は・・・。

その中でも、在家のものは法を実現することに対する障害がたくさんあり、多くの過ちの罪過が生じる。出家したものは、それとは逆であるので、輪廻を退ける抛り所（身体）は出家したものが最高である。それゆえ、賢者は出家を欲すべきである。『勇猛所問経』に・・・とおっしゃっており、これによって具足戒をとることを願うようにお説きになっている。『大乘莊嚴經論』にも・・・とお説きになっている。

それゆえ、輪廻から抜け出る解脱を実現するために出家することが賞賛されているばかりではなく、波羅蜜〔乗〕や密教の観点から一切智者の境地を実現するためにも、出家が最高の抛り所（身）であると説かれている。出家戒は〔声聞、菩薩、密教という〕三つの戒律（律儀）のなかで〔声聞の戒である〕別解脱〔戒〕であるので、〔仏の〕教えの根本である別解脱戒を尊重すべきである。

第二 [G2] 〔どのような道を修習することで輪廻を退けるのか〕。『親友への書簡』に・・・と説かれているように、宝のような〔戒・定・慧の〕三学（三つの修行項目）という道を修行する必要がある。

今の箇所である中人物の道だけに導けばいいのであれば、三学に導く仕方を詳しく挙げ〔て説明する〕必要があるけれども、そうではないので、慧〔学〕である分析的瞑想（観）と心の学〔すなわち定学〕である精神集中（止）を生じる仕方は、大人物の箇所では説明するので、ここでは戒〔学〕を修行する仕方を要約して述べよう。

そのうち、最初に、戒律のメリットを繰り返し考えて、喜びを強化しなければならない。すなわち、『親友への書簡』に・・・とあり、また『スパーフ所問経』に、・・・とおっしゃっているように考えるのである。

る。

〔戒律の誓いを〕誓ったあとで〔その戒律を〕護ったならば、メリットが非常に大きい、護らないならば、さらにデメリットは大きい。すなわち、『比丘を尊重する経』に・・・とあり、また『文殊根本タントラ』にも・・・とお説きになっているように、〔戒律を〕護らなかつたデメリットを繰り返す考えるべきである。

『三昧王経』に・・・と説かれているように、〔在家で戒律を護る者である〕優婆塞（うばそく）に制定された五戒（bslab pa'i gzhi lnga）を完全に余すところなく護ることは、比丘においてさえ無くなるであろうと説かれていた、その今の時代に、〔戒〕学に努力することは、とりわけ大きな成果が得られるので、〔戒を護るように〕努力すべきである。すなわち、同経に・・・と説かれている。

どのように〔戒を〕護るべきかという、その護り方は、根本墮罪が生じる四つの原因のうち、（1）無知に対する対抗手段として、〔戒・定・慧の〕修行項目（学処）について聴聞し知るべきである。

（2）注意散漫（放逸）に対する対抗手段として、取るべきものと捨てるべきものの対象とその様相を忘れない注視（念）と、一瞬一瞬、〔行為の行われる身・口・意の〕三つの門に対して詳しく観察し、善悪のいづれに向かうかを意識している注意深さ（shes bzhin・正知）と、自分や法を証人にして悪〔行〕を恥じる慚（ざん）と、他の人に非難されることになると思って恥じる愧（き）と、〔自分の犯した〕悪行に対する異熟〔果〕を怖れてためらうことなどを護るべきである。

（3）敬意を払わないことに対する対抗手段として、教師（仏陀）と、〔彼によって制定された〕禁止戒と、梵行（清浄なる行）を行う人たちに対して敬意を払うべきである。

（4）煩惱が多いことに対する対抗手段として、心をよく分析して、何であれ勢力の大きい煩惱に対して、努力して対抗手段を講じべきである。

このように〔これら全てを護ろうと〕努力せずに、その〔一つの項目〕だけに違反しても過失は小さいのであると考えて、禁止戒に対して弛緩した態度で取り組むのは、ただ苦しみを得るだけになる。なぜならば、『律分別』に・・・と説かれているからである。

したがって、戒律違反の墮罪に染まらないように努力し、たとえ〔罪に〕染まったとしても、平気でいてはならず、墮罪と罪を修復するために、〔仏によって〕説かれたように努力しなければならない。

以上のような仕方でも〔戒律を〕護る者が〔声聞のための〕別解脱戒を持つ者であるならば、真言〔乗における戒律〕においても同じ〔ように別解脱戒を護る必要が〕ある。なぜならば、『スパーフ所問経』に・・・というように、在家の密教修行者（sngags pa khyim pa）もまた、出家の徴のたぐいと、業の儀軌と、個々の禁止戒の儀軌のいくつかを除いて律に書かれている通りに〔別解脱戒を護る〕べきであるならば、出家した密教修行者は言うまでもないからである。

カムルンバ御前は・・・。シャラワ御前も、・・・。ゲシェ・〔ドム〕トンパ御前も・・・。ジョオ〔アティシャ〕御前も・・・

中人物と共通の道の階梯における心の訓練について説明し終えた。

以上のように、輪廻の不利益（不都合nyes dmigs）を様々な観点から長い時間、修習したことによって、生存（輪廻srid pa）全ては火が燃え盛る穴のようなものであると見る〔ようになつ〕て、煩惱と苦が完全に静まった解脱を達成したいと心あくがれている、そのような人が、道である三学を学ぶならば、輪廻から解放される解脱を達成するが、それもまた人や天〔に生まれる〕栄華（dpal・吉祥）のような再び〔この世に〕戻ってくる〔ような〕ものではないが、しかし〔その人の、〕欠陥（skyon）が尽きることも優れた性質（yon tan）を得ることも部分的なものであるので、自利は完全ではなく、まさにそれゆえ利他も部分的

なものにすぎない。そこで最終的には、仏陀に勧められて大乘に入らざるを得ないことになる。それゆえ、知恵あるものたちは、最初から大乘に入るのが理に適っているのである。・・・

ここで、人々の平安と素晴らしさ (brjid bag) と人としての能力 (rtsal) とは、利他の荷を担うことを意味しているというのが正しい。なぜならば、自利のみを目指すことは、獣にも共通しているからである。

それ故、偉大な人たちの本性 (ngang tshul) は、他者の利益と平安 (phan bde) に一心に努力することである。『弟子への手紙』に・・・とある。

以上のように、衆生が苦によって普く苦しんでいる (kun tu gdungs pa) と見て、その〔衆生の〕ために忙しくするものを「人物 (skyes bu) 」と言い、また彼を「智者」とも言う。同書の中に、・・・。

それ故、自他にとっての全ての良いこと (legs pa) の源であり、全ての不都合 (rgud pa) を取り除く薬であり、智者である全ての人物が歩む偉大なる道、見たり、聞いたり、触れたり、念じたりすることでも全ての衆生を養育するもの、利他に組み込むことによって自利は欠けることなく、付随して成立するところの、方便に非常に巧みな〔能力〕を持つ大乘に入ったもの、〔かれは〕「おお、私は、得る〔べきもの〕を正しく得た」と考えて、人としての能力の全てを使ってこの、乗のうちの最高のもの (大乘) に入るべきである。

そうであるならば、大人物の道の次第について心を訓練する (blo sbyang ba) ことに三節ある。

[F1] 大乘の入り口は発菩提心だけであると示す。

[F2] その心をどのように生じさせるか、というそのやり方。

[F3] 菩提心を起こしたのち、行を実習する仕方。

第一 [F1]。以上のように大乘に入るべきであるならば、どの入り口から〔入るべきである〕のか、と思うならば、それについて勝者は、波羅蜜〔乗〕と真言乗の二つをお説きになったのであって、それ以外の大乗は存在しない。

その二つのうちのいずれに入門するとしても、入るための門は菩提心のみである。すなわち、その〔菩提心〕が心に生じたときには、他の何も〔心に〕生じなくても大乘に属するもの (theg chen pa) であると設定する〔ことができる〕が、その〔菩提心〕から離れたときには、空性を覚る〔智慧〕などのどんな優れた性質 (yon tan) があっても、声聞などの境地に墮して (p.134)、大乘から退いた〔ことになる〕と、たくさん的大乗經典に説かれているし、論理によっても〔そのように〕証明されるのである。

従って、大乘に属するものは、その〔菩提〕心があるかないかによって、そうであるか否かが判断される (rjes su 'gro ldog byed) のである。

同様にまた、『入菩薩行論』に、その心 (菩提心) が生じるや否や勝者の子 (菩薩) となると説かれている。また、『弥勒の御事績』にも・・・というように、〔菩薩〕行を修行していなくても、その心 (菩提心) があるならば菩薩であると〔言えると〕おっしゃっている。

従って、法 (教え・經典) が大乘の法であるというだけでは十分ではなく、その〔担い手である〕人間が大乘に属するものの列に加わっているということが重要なのである。

〔ある人を〕大乘に属するものと言える〔かどうか〕も、まさに菩提心〔があるかないか〕に依っているので、その〔菩提〕心を単に〔頭で〕理解しているだけならば、大乘に属するものについても、それ (菩提心) の場合と同じ〔で単に頭で理解しているにすぎない〕。特質の全てを備えているようなその心 (菩提心) があるならば、大乘に属するその人も完全なもの (rnam dag) になるので、それに向けて努力すべきである。

ここで『華嚴經心陀羅尼 (sdong po bkod pa'i snying po)』に「良家の子よ、菩提心は仏陀の性質 (chos・法) 全ての種子のようなものである。」と説かれていることについての確信 (nges pa) を得る必要があるので、それを説明しよう。それについて、水、肥料、熱、土などは、稲 (bras) の種子と一緒にあったならば稲の芽の原因となるが、小麦 (gro) や豆 (sran ma) などの種子と一緒にあったならば、それら〔小麦や豆〕の芽の原因になるので、それら〔水や肥料や熱や土〕は〔いろいろなものに〕共通の原因である。大麦 (nas) の種はどのような補助的原因 (rkyen・縁) と一緒になっても稲などの芽の原因となることはあり得ないので、大麦の芽だけに限定された (thun mong min pa) 原因であり、その〔大麦〕によって助けられて水、肥料など〔共通の原因も〕も大麦の芽の原因となることができる。それと同様、無上なる菩提〔を求める〕心は、仏陀という芽の原因の中でも種子のような、それだけに限定された原因であり、空性を覚る般若〔の智慧〕は、水や肥料などと同じく〔声聞、独覚、菩薩の〕三つの菩提全部に共通の原因である。

それゆえ、『宝性論』にも、「最上の乗に対する信解 (=菩提心) は〔仏陀の〕種子であり、般若〔の智慧〕は仏陀の法を生じさせる母 (原因)」と言って、最上の乗に対する信解は、父という種子であり、無上を覚る般若〔の智慧〕は母のようなものであるとおしゃっている。たとえば、チベット人の父親には中国人やモンゴル人の息子が生まれることはあり得ないので、父親は息子の家系を限定する原因であるが、チベット人の母親には様々な〔種族の〕息子が生まれるので共通の原因となるのと同様である。

ナーガールジュナも、・・・と〔『般若波羅蜜讃』において〕般若波羅蜜に対して賛嘆しているので、声聞や独覚も〔覚るために〕それに依るのであり、それゆえ、般若波羅蜜に対して「母上 (yum)」というようにもおっしゃっている。それゆえ、〔般若波羅蜜は〕大乘、小乗という両者の息子に対する母上であるので、空性を覚る般若の智慧によって大乘と小乗が区別されるのではなく、菩提心と広大行 (spyod pa rlabs che ba. rlabs chen = nus pa dang yon tan sogs ha cang chen po) とによって区別されるのである。すなわち『ラトナーヴァリー』に・・・と言って、哲学的な見解で〔声聞乗と菩薩乗が〕区別されるのではなく、行によって区別されると説かれている。

以上のように空性を覚る般若の智慧であっても、大乘の、他と共通しない固有の道にならないならば、それ以外の諸々の道になっても何にもならない。

それ故、菩提心を〔覚りへの道の階梯の〕実践的教えの中心 (mthil) に据えて (bzung nas) 行をしていかなければならない。

第二 [F2] 〔その心をどのように生じさせるか、というそのやり方〕に三節ある。

[G1] 菩提心を訓練する順序

[G2] 〔菩提心が〕生じた〔かどうかを判断する〕基準

[G3] 儀軌によって〔生じた菩提心を〕維持する仕方

第一 [G1] には、[H1] ジョオジェ [アティシャ] から伝わった「七つの因果の秘訣」と、[H2] シャーンティデーヴァ菩薩のテキストに出ているものによって訓練する〔やり方〕の二つがあると思われる。

〔第一 [H1] 〕七つの因果とは、完全な仏陀〔の境地〕は菩提心から生じ、その心 (菩提心) は、殊勝な考え (増上意樂) から、〔その〕殊勝な考えは憐れみの心 (悲心) から、憐れみの心は慈しみから、慈しみは報恩の心 (drin du gzo ba) から、報恩の心は恩を思う心 (drin dran pa) から、恩を思う心は〔一切衆生を自分の〕母であると見なすことから生じる、という七〔項目〕である。

これに二節ある。

[I1] 〔因果の〕順序について確信を生じる。

[I2] 順番に訓練することの本論。

第一 [I1] に二節ある。

[J1] 大乘の道の根本は悲心であると示す。

[J2] 〔七つの〕因果の他の項目がその原因や結果になる仕方。

第一 [J1] に三節ある。

[K1] 最初に重要なこと。

[K2] 途中で重要なこと。

[K3] 最後に重要なこと。

第一 [K1]。大悲心によって心が動かされるならば、一切衆生を輪廻から救い出すために必ず誓願を立ててであろうし、悲心が小さければ、そのようにしよう〔という気持ち〕は起こらないので、衆生を残りになく解脱させるという重荷を担うのは、それ（大悲心）に依っているからであり、またその重荷を持つとしないならば大乘に属するものの列に加わることはあり得ないので、悲心はまず最初に重要なのである。『無尽意所説経』に・・・とあり、また『伽耶山（がやせん）経』に・・・とある。

第二 [K2] 〔途中で重要なこと〕。以上のように一度その心（菩提心）を起こして〔行を〕始めた（zhugs pa）としても、衆生は無数で行いは悪く、修行されるべきこと（bslab bya・学処）も極めて行い難いし、際限はなく、時間も計り知れないほど必要であると見て、意気消沈（zhum）して小乗に陥ったとき、大悲心を、一度起こすだけでなく、さらに増大するように〔何度も修習して〕習熟することによって、自らの楽苦を少しも（mi）考慮することなく、利他を決して厭うことなく（mi skyo ba）、〔悟りのための〕資糧一切を容易に完成させることができるのである。

第三 [K3] 〔最後に重要なこと〕。諸仏が〔仏〕果を得たときにも、小乗のように寂滅に安住することなく、虚空が存在する限り衆生の利益をお図りになることも、大悲の力〔による〕。なぜならば、それがなければ、声聞と同様になってしまうからである。

例えば、農作物〔を作る〕ときに、最初に種〔を植え〕、途中で水〔をやり〕、最後に熟することが重要であると同様、仏陀の果についても、最初と最後と途中との三つの時期において〔常に〕大事なものは悲心であると、栄えあるチャンドラキールティはおっしゃった。

従って、シャンナ・チュントンパが、ジョオ〔アティシャ〕に教誡をお願いしても、世間のことを忘れ、菩提心の修習をなすべきであるというようなこと以外は〔アティシャの口から〕出てこなかったと言ったことについて、善知識〔ドム〕トンパは恥じ入って、それはジョオ〔アティシャ〕教誡の、心の底から出てきたもの（mthil phyung ba < 'byin ba）であるとおっしゃっている。すなわち法の本質を知っていらっしゃるのである。

確信を得ることについても、これだけでは難しいので、繰り返し繰り返し〔資糧を〕積み〔罪を〕浄化し（bsag sbyang）、『華嚴経』などの聖言（gsung rab）と、その意図を解釈した〔論書〕を参照して、揺るぎない確信を求める必要がある。すなわち、栄えあるマコル（マティスチトラ？）が・・・。